

川柳 さいたま

年賀風交 美江賞作品募集



角館

平成30年 (2018年)

1月号 (No.698)

日川協加盟

巻頭言

正月歳時といふこと

願法みつる

日本の春夏秋冬四季の歳時は、風土的で心が温まる。歳時は、原点が勤勉な農耕・漁業に根ざす地域色ある祭事でありハレの場だったのであろう。それが今や和洋混交の歳時文化になってしまい、しかも興行的催事になっている。言葉の綾ではない。文化の変色である。そんな中、正月とは暦の上では一月の別名だが、今では三が日あるいは松の内。街では松飾りよりもクリスマスツリーのほうが似合う有様は、まさにごった煮の風景である。それぞれに準備や撤収は大変なのだが、人々の目線は次の催事に移っている。薄っぺらな世情なのだ。

川柳界ではそれぞれに新年句会を和やかに迎えられることだろう。しかしこの穏やかさもしばしの季節。いずれ、誌上大会という前触れを伴って、各種大会という催事の嵐が、これでもかこれでもかと列島や地域を連続して襲ってくる。これには、真面目な川柳人であれば辟易していることだろう。大会川柳なるものを、じっくり噛みしめる余裕がないのだから。

大会催事の集中を避けること、あるいは取り止めることは出来ないものだろうか。我が吟社の在り様を考えて見るのも、正月歳時の務めであるのかも知れない。多くの皆様のご意見を、交流させたいものである。

日日是好

願法みつる

古今東西神の社がよく揉める

シナリオのない一年へ賽が舞う

道徳の正反合へ四季の風

千年の美を一瞬の夢に見る

明けまして損したような顔ばかり